

ヨブ記（「舊約聖書」）其の二

ヨブの災禍を知つて、エリバズ等三人の友がヨブを「慰めんとて」やつて来る。ヨブは彼等に向つて、我は「我心の痛」みによりて物云ひ、我魂の「苦しきによりて歎かん」と云ひ、信仰に於て全く悖る事もとの無かつた自分がかかる災厄さいやくを被つたのは何故か、「すでに我の罪なきを知」り給ふ神が自分を何故こんな目に遭はせるのか、その譯が知りたい、おう、神よ、「何とて御面みかほを隠し我をもて汝の敵となし」給ふや、我は「全能者に物言」ひ「神と論ぜん」事を望むと叫ぶ。

すると、三人の友は代る代るヨブを難じるのだが、その言分は詰る處同一であつて、例へばエリバズは「請ふ想ひ見よ誰か罪なくして亡ほろびし者あらん義ただしき者の絶たれし事いづくに在ありや」と云ふ。詰り彼等はヨブに對し、お前の苦難は罪を犯した報いでしかなく、正義の神は正當な罰を下されたに過ぎないと云ひたいのだ。苦しむ友を「慰め」るところか、何とも冷酷な言種いひぐまだ

が、ヨブは卻つて友人達を罵倒して云ふ。汝らは「いつはりを造り設くる者」、「皆無用の醫師なり」。

然らばヨブにとつての眞實とは何か。彼は云ふ。神は全き者と悪しき者とを等しく滅し給ひ、災の俄かに人を殺す如き事あれば罪なき者の苦しみを笑ひ見給ふ。或は云ふ。或人は榮へを極め穩かに安らかに死し、或人は心を苦しめて死し終に幸ひを味はふる事なし、共に齊しく塵に臥して蛆に蔽はる。或は又云ふ。孤兒を母の懷ろより奪ふ者あり、貧しき者衣なく裸にて歩き飢ゑつつ麥束を擔ふ、町より人々の呻き立昇り傷つけられたる者の叫び起る、然れども神はその怪事を省み給はず。

これを要するに、正義の神が存在するのなら、人の生は何故かくも殘酷で理不盡としか思へぬ出來事に満ちてゐるのか、ヨブはそれが云ひたい。さういふ人の世の昔も今も變らぬ眞實の姿に目を向けようとせず、因果應報の紋切型に甘んじてゐるから、友人達は「いつはり」を語る「無用の醫師」でしかないのである。

處で、ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」には、「ヨブ記」と同じ問題が扱はれてゐるとE・グッドハートは云ひ、作中のこんな逸話を紹介してゐる。主人公の一人ドミトリ

が夢を見る。草原を馬車で走つてゐると、突然、子供連れの女に遭ふ。火事で焼け出されて、家を無くして彷徨つてゐるのだ。ドミトリーは何故子供が泣いてゐるのかと御者に問ふと、家が焼けたからだと言へる。だが、グッドハートによれば、ドミトリーが訊きたかつたのは、何故この世は、家が焼けて、罪の無い子供が苦しまねばならぬ様に出來てゐるのか、といふ事だつた。續けてグッドハートは書いてゐる。「ドミトリーの問ひ掛けは、ヨブが自らに發した問ひ掛け、即ち凡ゆる時代に於て何度も繰返し發せられねばならぬ問ひ掛けであり、一つの時代の知的誠實を證すのは、それがこの問ひ掛けを發して、答へを求める能力を有するか否かである」。

「カラマーゾフの兄弟」は固より、シェイクスピアの「リア王」も、メルヴィルの「白鯨」も、カフカの「城」も、それぞれの時代の「知的誠實」の證しに他ならないが、それはともかく、「ヨブ記」の最後に神は三人の友に怒りを發し、我について汝等が語つた事は我僕ヨブの如く正しくない、と云つて叱責する。即ち神はヨブの「知的誠實」を嘉するのである。宗教も哲學も文學も、ヨブの様に、まづは人の世の眞實の在るが儘を正直に見据ゑる處から全ては始まらねばならないが、それは頗る難しい事だから、何時の世にも、答へ無き問題を答へあるが

如くに思ひ做して、「無用」の處方箋を書きたがる手合は後を絶たない。

〔文語譯舊新約聖書、日本聖書協會〕